

「これからの都市経営」

—青年市長に聞く(その5)—



福原 慎太郎
ますだ
益田市市長(島根県)



井原 健太郎
やない
柳井市長(山口県)



倉田 哲郎
みのお
箕面市長(大阪府)



山中 光茂
まつさか
松阪市長(三重県)

司会・コーディネーター

細野助博

中央大学総合政策学部教授

当選回数はいくつもの、意欲あふれる若手市長にお集りいただき、都市経営についてのビジョン、抱負を伺う座談会「これからの都市経営」―青年市長に聞く―。5回目となる今回も、エネルギーギッシュかつ、従来の概念にとらわれず都市経営に取り組む山中光茂・松阪市長、倉田哲郎・箕面市長、井原健太郎・柳井市長、福原慎太郎・益田市市長にお集まりいただき、市長を目指した経緯や、都市が抱える課題とその対応策、市民協働の視点での行政の在り方、市長としてのリーダーシップなどについて、幅広くご議論いただきました(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)。

日々の生活の中の「当たり前の幸せ」を感じられるまちをつくりたい。



山中 光茂
大阪市長(三重県)

私が市長を目指した理由

細野 近年は、年齢が若い首長が次々に登場しています。若さならではの行動力やそのリーダーシップが住民たちに支持されてのことでしょう。本日は、30代の市長にご登壇いただきました。それでは、まず市長を目指された経緯やその思いについてお話しただきたいです。

山中 実は私はもともと政治家を目指してきただけではありません。政治家の卵ばかりが入る松下政経塾に私も入塾しましたが、その中では異色の存在でした。当時から政治活動や選挙活動にかかわったことはほとんどなかった。

しかし、今、振り返ってみても、まさに激動の日々でした。何しろ、出馬を決めたのは1月の下旬で、選挙日は3月1日。1カ月余りの準備期間しかなかったわけですが、その中で、独自在マニフェスト「柳井ニューディール」を作成し、選挙戦に臨みました。議員経験も行政経験もない、本当に普通の34歳の1青年ですが、たとえ実績がなくても、しがらみを一切持たず、市民の目線を持って活動できることが私の強みでした。市長になった今も、常に素人の良さ、市民目線を生かして、市政を運営していきたいと考えています。

福原 私は高校まで地元の益田市で過ごし、大学卒業後に自動車会社に勤務。その後3年間松下政経塾で勉強しました。実は私も、山中市長と同様、もともと政治家を目指したわけではありませんでした。政治家は汚い、この職業だけは就くものではないと思っていたくらいです。ただ中学生のころからふるさとに尽くしたいとの思いがあり、その実現のためにも、やはり市長の道を目指さなければと考え直しました。最初の市長選挙に出馬したのは31歳のとき。このときは駅前ビルの再開発が選挙の争点で、落選しましたが、次回選挙にも出馬し、当選することができました。

益田市は非常に歴史もあり、自然も豊かで、特産物も豊富にあります。しかし、あまりにも恵まれ過ぎたせいか、過疎化が進んでいる一方で、どこかのんびりとして、危機感が少ないのが悩みの種です。この豊かさを後世まで残していけるように、さまざまな改革が必要だと考えています。

たほどです。

そんな私のライフワークは途上国で医療ボランティアに従事すること。地球の裏側で起こっている問題や、その痛みについても自分のこととして感じられる人間でありたい。これが私の原点です。実際に二度ほどアフリカへ赴き、医師としてさまざまな人の痛みに触れてきましたが、やがて途上国ばかりでなく、自分の身近な社会の中にも多くの痛みや声なき声があることに気がきました。そのような痛みや声に対して、自分は何ができるのか。その解決策の一つが、たまたま政治の世界にあつたわけです。

市長に就任してみてもあらためて感じるのは、やはりその役割の大きさ。市長としての私自身の発言や行動、判断そのものが市民の幸せに直接つながっていることを切に感じます。

倉田 私はもともと郵政省(現総務省)の職員でした。一企業のためというより、広く社会全般を支える仕事をしたい。それが国家公務員を目指した動機です。総務省では情報通信政策に携わりましたが、私が何より大切にしていたのは、ユーザーとしての視点でした。国のルールを決める立場であると同時に、自分一人の国民であり、ユーザーでもある。使い手としての私が不便だと感じたり、問題と感じたことは、国民の皆さんだって同じように感じているはず。そのような思いで、迷惑メール対策など、さまざまなプロジェクトを担当してきました。

そんな私が、出身地でもない箕面市とご縁を持ったのは平成15年からです。この年、総務省から箕面市の政策総括監として出向した

これまでの概念が瓦解するまちづくり

細野 市長としての心構えや熱意についてお話しいただきました。それでは、現在市長に就任されて、具体的にどのようなまちづくりを展開しているのか。その点をお話してください。

福原 私は今こそ文明の転換期ではないかとの問題意識を持っています。近年の環境問題、あるいは金融危機を発端とする世界的な大不況などに直面してみると、その思いはますます強くなってきていますね。つまり、もはや世界的に見ても近代以降の物質文明が限界を迎えていると感じざるを得ないのです。

だからこそ、これからのまちづくりは、開

生活者としての視点を生かせる地方行政に大きな魅力を感じました。



倉田 哲郎
箕面市長(大阪府)

のがきっかけで、平成18年まで勤務しました。行政の最前線である市役所で仕事をし、すぐに「自分がやりたかったのはこれだ」と実感しました。一生活者、一ユーザーとしての視点を普段から生かせる地方行政に大きな魅力を感じたわけです。その後、総務省を退職し、意を決して、箕面市の市長選挙に出馬して、市長に就任しました。

井原 私は皆さんと違って、小学生のとき、足尾鉍毒事件に携わった田中正造のエピソードを教科書で読んで感化されて以来、政治家になりたいという夢を持ち続けてきました。大学を卒業すると、国会議員の事務所に入り、5年間秘書として務めました。社会人の経験がないものですが、分らないことばかりでしたが、秘書時代からずっと自覚してきたことがありません。それは、自分一人の力には限界があるし、できないことも多い。しかし、



多くの方にかかわってもらえれば、より大きなこともできるし、成果も上げられるというものです。市長という立場で、多くの人の協力を得て、皆で協力してまちづくりを進めたい。地方行政の場でその役割を果たしていきたいと考えて市長選挙に出馬しました。

発によって豊かさを求めるのではなく、元からある自然など、まちの資源を生かしていくことが必要なのではないかと考えています。私が掲げた目標は非常にシンプルで「一流の田舎まち」を目指すというものです。二流、三流の都会を求めずに、田舎の良さを生かしたまちづくりを取り組んでいます。

山中 私も同感です。田舎には田舎の良さがあります。過度にムリをして華やかさを求める必要はありません。開発やハコモノ整備はかりを重視せず、福祉や保育、教育を充実させ、地味でも安心して暮らすことができる魅力的な田舎まちをつくること。そんな日々の生活の中で「当たり前の幸せ」を誰もが感じられるまちづくりを行っていききたいと思えます。

現在、全国の都市で「中心市街地活性化基本計画」が策定されていますが、大阪市ではあえて計画を国に提出しないことにしています。計画を立てると、国から支援を受けられますが、どうしてもハコモノ整備や開発を前提にした計画になってしまう。それが市民の幸せにつながると思えないからです。

井原 柳井市は交通アクセスは良くないし、大手企業の立地が進んでいるわけではありません。実際、私の元にも大規模道路の建設など、さまざまな要望がありますが、果たして道路ができ、新幹線が通ると、まちが潤うのか、大いに疑問です。

福原市長は一流の田舎まちとおっしゃれましたが、柳井市も目指すところは同じです。ただ、そのような思いを市長である私一人が持つだけでは不十分です。多くの市民と思いを共有し、一丸となってまちづくりを進める



福原 慎太郎
益田市市長(島根県)

二流、三流の
都会を求めずに、
「一流の田舎まち」
を目指しています。

字化することができました。
福原 多くの地方都市で共通しているのは危機感がないということでしょうね。これまで改革をしなくても国から多額の支援があったし、公共投資も割り振られてきました。だから、何とか持つてきた面があるのですが、これからは困っても国が助けてくれません。私は選挙中からずっと「市職員半減、サービス倍増」を訴えています。もはや厳しい財政事情を考えると、税金をアップする以外、行政がこれまで通りすべての事業を担うことはできません。まずは市民にその現状を知ってもらいたいですね。

細野 市民との協働が重要性を増している昨今ですが、その仕組みをどのように構築されていますか。具体的にお話してください。
井原 柳井市では週に1回「市民の皆さんとの意見交換会」を実施しています。市の重要施策や私が掲げたマニフェストなどについて意見交換を行う場です。私が目指しているのは市民の市政への積極的な参加。だからこそ、意見交換会は市民対行政、市民対市長という対立の図式ではなくて、市民同士でこのまちをどうしていくかという視点で議論し合う場に

市民との協働の仕組みの構築の仕方は

福原 益田市でも4月1日付で機構改革を行いました。経営企画部、市民サービス課、都市デザイン課、文化交流課などを新設し、より市民サービスを充実させていきたいと考えています。

倉田 市役所内の改革も重要ですね。箕面市では民間の視点で市を売り込む「箕面営業課」を設置しました。さらに、その課長をはじめ、民間企業経験者4名を中途採用しました。行政組織に大きな変化をもたらしてほしいと思います。また、駅前や観光エリアの再整備などのプロジェクトについては、部局横断型のチームも編成し、ここを中心に施策を展開しています。

倉田 行政の専権事項だった予算編成についても、市民参加が重要になってくると思います。編成過程の段階で市民に公開して、大いに議論する。その声を反映させて議会に提出するということも、考えられますね。
また、そのほかの施策についても積極的な情報提供が必要です。箕面市では部長以上の役職は皆ブログでの発信を義務付けて、正確・迅速な市政情報を市民に伝えています。
福原 これまで行政は情報を市民に知らせよ

に対して説明会を行ってきましたが、まだ計画立案段階で「意見聴取会」を行っています。議会に上がる前の計画を、議会に先駆けて市民に公開し、意見を聴くというのは議会軽視ではないかとの批判もありますが、まだ確定していない段階だからこそ、市民の意見を聴き、反映させることができます。ぜひ、制度化していきたいですね。



していききたいのです。専門的な知識や情報も必要ですので、もちろん行政の果たす役割もありますが、あくまでも主役は市民だと考えています。
山中 従来、大規模事業を行う際には、ある程度計画が固まった段階で、市民

でも、その素晴らしさは暮らしている市民にとっては当たり前過ぎて、なかなか実感できていない。そのために、満足感も持っていないし、外部への都市PRも怠っていました。外様ゆえにまちの素晴らしさが見える私は市民に対して「本当に箕面市は素晴らしい都市です。誇りを持ってください」と常に申し上げています。併せて、住宅都市、観光都市という特徴をさらに生かすために、積極的に市外へのPRを進めています。
福原 やはり、その市独自の特徴を知り、その上でまちづくりを展開すべきでしょう。私はそのためにも「人間的な面」「経済的な面」「視覚的な面」から一流の田舎まちづくりを進めて

いきたいと考えています。人間的な面は、皆さんもおっしゃるように、地域に誇りと自信を持ち、生涯現役で健康に暮らすこと。「経済的な面」では地域の生活文化や資源をものづくりや交流などに生かして、経済的にも発展すること。「視覚的な面」では田舎の原風景を大切にしたい。景観まちづくりを進めること。この3点を具体的に進めています。
財政問題にどう対処するか
細野 独自のまちづくりを行う上でもどうしても避けて通れないのは、財政問題です。全国的に厳しい財政状況を抱えた都市が多いと



井原 健太郎
柳井市市長(山口県)

政治家は
小学校以来の夢。
多くの人の協力を
得て、まちづくりを
進めたい。

思いますが、財政問題についてはどのようなように考えてでしょうか。
山中 田舎の良さを生かすまちづくりとは、「足るを知るまちづくり」と言い換えることができます。
つまり、税収やまちの規模、特徴に見合ったまちづくりを進めるということです。その前提となるのが財政やコストへの意識です。松阪市では今年の8月から全国で初めて、リアルタイムで市の債務残高が表示される借金時計を市役所内へ設置します。職員はもとより、市民も財政への関心を高めていただきたいと思いますね。
倉田 箕面市ではここ数年、歳出に対し歳入が不足する歳出超過の状態でした。基金の取り崩しなどで補ってんしてきましたが、数年で底をついてしまうことが予測されていました。この不健全な状態から脱却するために、市長就任以来、徹底的な行政財政改革を進展させ、収支均衡を目指してきました。平成25年度までに総額273億円の財源不足を解消するという大改革ですが、赤字体質を抜本的に変えていくため、妥協はできません。
蛇足ですが、改革の推進に当たって、自分の若さは非常に武器になっています。経験が浅く、知識がないからこそ「分からないから教えてください」と率直に聞くことができます。それぞれの事業について、一つひとつその経緯や経過を粘り強くただせるのも若さゆえでしょう。すべて表に出し、自分の感覚で「これはおかしいのではないか」というものについては、徹底的に議論を行い、圧縮・結びつける。その成果として6年ぶりに経常収支比率を黒



細野助博
(中央大学総合政策学部教授)

うとしない。市民も知ろうとしない。そのような傾向がありました。現在はやはりブログなり、ホームページなりで情報を積極的に伝えていくことは重要です。

また市民の声を職員が知ることも大切です。「市長への手紙」の内容も庁内会議で全部共有しています。

リーダーシップをどのように発揮するか

細野 近年は市民の意見も多様化、複雑化しているといわれています。調整も必要になるし、政治的な落とし所をどこにするのかについても考えなければなりません。政治的なリーダーシップを発揮するために心掛けていくことについて、お話しください。

山中 市民の声をまずはじっくり聴かせていただくのが基本です。そうして、率直に判断させていただき、結果責任を取る。これに尽きるところです。そのためにも、私自身がぶれては絶対にいけないと、これだけは戒めていますね。

また、自分の判断の基準や行動なども毎日ブログで明らかにしています。その基準に従って政治活動を行い、それを市民に評価してい

ただ。これが私なりのリーダーシップの在り方です。

倉田 意見が対立したり、複数の意見が出たときに、それを解決するのが行政の役割の一つです。まずは、それぞれの意見に耳を傾ける必要があります。聴いてみると、その表れ方は異なっているものの、共通した問題意識を持っているという場合もある。一歩立ち止まって相手方の意見をくみ取って、最適な解決策を提示するのが大事だろうと思います。その意味でも説明と説得は大切ですね。

ただ、最終的にはどうしても妥協できないという部分もあります。その際には腹をくくって判断をする。そのような断固とした態度も重要になってきます。

井原 例えばA、B、Cという3つの意見があったら、当事者の皆さんに、なぜAなのか、なぜBという考えに至ったのか。なぜCという考えなのかを話してもらおう。それを多くの関係者・市民と聞いて、その上で市長が判断する。そのような透明性を確保するオープンな場が大切だと思います。リーダーに求められるのは決断力ですが、決断に至るまでの過程も大切にしたいと考えています。

福原 自分の価値基準をしっかりと判断すること。判断をした後は、しっかりと説明責任を果たすこと。これが政治家の責任です。先輩の首長に「次の選挙のことを考えなければ、かなりのことができる」とアドバイスされたことがあります。逆に言えば、次回の選挙を考えれば、大きな改革ができないということかもしれません。私自身も、選挙のことが頭をよぎることもありますが、リーダーシッ

プを発揮して、明確な判断、断固とした改革の方向性を示していきたいですね。

細野 ありがとうございます。それぞれ新しい発想やシステムを地方行政の中に取り入れていってほしいなことがよく分かりました。共通しているのは、市民の声をよく聴くということですね。市民の意見を大事にしなから、新しい改革にも積極果敢に取り組んでいってほしいです。また、皆さん、あえて開発競争から距離を置いて、あえて田舎のまちづくりを展開されているのも印象的でした。これからは、市民と共に、魅力的なまちづくりが標榜されることを願っています。今日は長時間にわたり、ありがとうございました。

(平成21年6月3日、全国都市会館にて実施)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は11月号に掲載予定です。

